

---

SoulEater - fate-

frost

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SoulEater-fate-

### 【Nコード】

N7809U

### 【作者名】

frost

### 【あらすじ】

SoulEaterとfateのクロスオーバー小説。

答えを得た彼が、SoulEaterの世界へ飛ばされてしまう。

彼の運命は再び動き出す。

テンプレ、独自解釈、オリジナル設定など多数存在します。  
勢いで書いて、矛盾もたくさん出てくるかもしれません。

苦手な方は読むのをやめたほうがいいと思われます。

更新が遅いですが、どうぞ！

8 / 18 に改変しました。

かなりお話を変えたので、初めから読むことをお勧めします。

？  
**（前書き）**

それなりに反応があったので・・・連載することにしました！  
ノリと勢いで書く予定です。

お付き合いいただけたら嬉しいです。

？

「凜、私を頼む。知つての通り頼りない奴だからな」

「アーチャー……うん！分かつてる。私頑張るから、きっとあいつが自分を好きになるように頑張るから！」

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂。俺もこれから頑張っていくから」  
そういつて、私は座へと帰還した。

そのはずなのだ。

なのに、今いる場所は砂漠地帯。  
口の中に砂が入って、じやりじやりする。

周りを見渡す限り砂、砂、砂。正直うんざりする。  
どこか街を探さないと、餓死する可能性もある。  
仕方が無いと歩き出す。

どの世界にいても、私の幸運値はEなのだろう。

「あつごめんねーちょっと、うっかりで落とす座標間違えちゃった」  
「

赤いアクマの言葉が頭に響く。あれ？

ちよつと現実逃避をした後に、思い出す。

私が、凜と別れた後、羊水のような場所に入った。

多分、座なのだろう。暖かく意識が解けていく。  
ここで、記憶は記録になり、私という存在が消えていく。  
そう感じていた。

「あつシロウ」

声のする方を見るとイリヤがいる。

始めはもうすぐ消える私に幻覚を見せているのか？

意味のないことなのに。そう思っていた。

しかし、目の前のイリヤは私を頭を叩き、

「もう！シロウ！無視しないでよ」

ほほを膨らませ、怒っているようだ。

なぜ、幻のイリヤに怒られないと……よく見ると本物のイリヤだ。

「なんでさ……」

「なんでって？」

「なんでイリヤがここに！」

「えー私聖杯だよ？なんでも夢が叶う願望機だよ？座の干渉ぐらい簡単だよ！」

「座の干渉……」

「私の思いが聖杯に反応したみたいで」

「思い？」

「うん。やっぱりシロウには幸せになって欲しいから」

「イリヤ……」

「私お姉さんだよ！？弟の幸せのために人肌脱ぐんだから」

そっつい、イリヤは何かの呪文を唱えだした。

「リンやサクラにも手伝ってもらって、シロウをここじゃない世界に送るね？」

私の足元に、魔方阵が展開される。

「え……！？」

目の前が真っ白になる。そのときに聞こえたイリヤの声。

「シロウは自分の信じた道を歩き続けて」

思い出した。

そういえば、そうだった。なぜこんな場所にいるのか。その記憶がよみがえる。

そう、ここは私の知らない異世界なのだ。

まずは体の構造を把握するところから、はじめる。

「トレースオン  
構造把握」

身体異常なし。受肉している模様

ただし、肉体年齢は、16歳

精神異常なし。

ただし、ところどころ記憶に摩擦あり

魔力異常なし。魔術回路も数本増える

ただし、ここでの世界に合わせてソウルプロテクトがかかる

投影異常なし。英霊時の能力を引き出せる

ただし、エクスカリバーは投影できない

ん？エクスカリバーが投影できないのか？

少し疑問に思ったが、投影できないのなら仕方が無い。

結果がでた。

基本的には体は良好である。しいて言えば、水分が少し足りなくらいか。

しかし、肉体年齢が16歳か……  
やはり筋肉がつく前の体は何かと不便である。  
この世界にあわせているのである。

もしくは赤いアクマのうっかりが発動したか……

「トレスオン  
投影開始」

出てきたのは、かんしょうばくや干将莫耶

陰陽二振りの短剣で黒い方が陽剣・干将、白い方が陰剣・莫耶。あの聖杯戦争中にはお世話になった夫婦剣だ。

構造把握の時同じく、自然に出せる。問題ない。

剣を破棄し、再び歩き出した。

甘く見ていた。やっぱり、赤いアクマのせいではないのかと本気で思う。

先ほどの現実逃避の会話は、飛ばされた瞬間に言われた本当の記憶では、ないのだろうか。

歩いても歩いても、砂漠ばかり。

そして、受肉しているということが仇となっているのか。  
水分を取ることが出来ていない。

このままでは、死ぬ。

それが、私の最後の記憶。

砂漠のと真ん中で、行き倒れた。





？  
(前書き)

ノリと勢いで書いています！  
何回か、読み返していますが、誤字脱字があれば報告していただけると幸いです。

？

目を覚ましたら、真っ白な部屋にいた。

どう見ても、学校の保健室だった。

「ふむ」

思わず考え込む。さっきまで、砂漠にいたはずなのだが、なぜこんな設備の整った場所にいるのだろう。

「あれ？起きたんだ」

人の声がしたので、思わず身構える。いつでも戦闘できるように。

「ソウル！倒れていた人が起きたみたい」

顔をのぞかせたのは、一人の少女。

ツインテールで、見た目は14歳くらいの少女。敵対心は無いようだ。

「あっ あん？」

もう一人男の子も来た。少女が言うには、ソウルと呼ばれていた男の子だ。

人間に見えるが……気配が少女と違う。

警戒しつつ、少女に尋ねる。

「ここは、どこなのだろうか？」

「ここ？ここは、死武専しぶせんの保健室だよ」

「なぜそのような場所に？」

「なぜって、貴方砂漠で倒れてたんだよ？」

マカ「アルバーンは武器職人である。

相方のソウルイターを死神様の元で仕える「デスサイズ」にするために、99個の鬼神きしんの卵と化した魂と魔女まじよの魂1個。合計100個の魂を集めていた。

もちろん、鬼神きしんの卵と化した魂を98個集め済みである。

今回の仕事は、切り裂きジャックという鬼神きしんの卵と化した魂を狩るために、ロンドンまで出向いた。

もちろん、仕事は楽勝である。

今日も仕事を終え、死神様に報告しソウルの運転で死武専しぶせんに戻っていた。

砂漠を通り、家に帰ろうとしていた。そのとき、赤い色の何かを発見した。

マカはそれに気がつき、ソウルに言う。

「ねえあれって、人じゃない？」

「まさか、こんな場所に人なんていねえよ」

「でも、倒れているように見えない？人だったらやばいんじゃないかなあ」

「とりあえず近くに行ってみるか」

ソウルと一緒に赤い何かに近づく。

近づくと解る。人だった。

白髪に肌はこげ茶色、そして赤い服を着ているのだ。見た目も服装も珍しい人であった。

よく見ると、まだ生きている。

うわごとで、

「タイガーが……タイガーが……」

なんていつている。しかし、タイガーって虎にでも襲われたのだから？砂漠だからありえないと思うが……

「このままほつといて、死なれたら目覚め悪いし乗せれる？」

「なんとかかなると思うが……いいのか？」

「Coolな男は、人助けをするもんでしょ？」

「まあそうだけだよー」

「あとで、死神様に報告すればなんとかなると思うしね」

マカは、倒れている男の人を引きずり、ソウルと二人で一緒にバイクに乗せる。

そして、そのまま保健室へとつれていったのだ。

「ここまで運んでくれたのか。お礼を言わなければな。ありがとう」  
にこやかにお礼を言う。

一応命の恩人なのだ。警戒心を緩める。

少女は少し顔を赤くし、

「とりあえず、休んでいてよ。死神様に報告してくるから」

そついつて、保健室から走り去るように出て行った。

「死神様……」

私は少女の言っていた死神という単語に引っかかりを感じていた。

死神とは、本来悪という定義に分類されることが多い。

死をつかさどるものだからそういったイメージが強いのだと思う。

彼女は死神様に報告をする。そういつていた。

ということは、ここを統括するのは死神だということが伺える。

私は、一体どういった世界に流れ着いたのか……もう少し調べるしかない。

そう考えていたら

「そういえば、お前なんで砂漠で行き倒れてたんだ？」

ソウルと呼ばれていた少年が、私に当然の疑問をぶつける。

「すまない。砂漠で行き倒れていたせいか、少々記憶が混乱しているようなんだ。だから、私がなんで砂漠で行き倒れになったのか覚えてないのだよ」

正直に答えても、向こうは信じてはくれないだろう。

砂漠で行き倒れて、熱のせいで記憶混乱くらいの嘘は許してもらえらるだろう。

「そうなのか」

「助けてもらったことには感謝している。あのままだったら、きっ

と死んでいただろうからな」

せつかくイリヤに新しい人生をくれたというのに、死んでしまっ  
ては元も子もない。

「ただいま！死神様がお呼びみたい。えーっと貴方も一緒に来て  
て」

どうやら少女が戻ってきたようだ。

「了解した」

ここは、死神様という人物に会っておくべきだろう。  
私自身の身の振り方も考えねばなるまい。

この場所を統括する死神……

どのようなひとなのだろうか。

そんなことを思いながら、少女の後をついていった。



？（後書き）

うーん。なんか微妙なオリジナルですね。

うまくエミヤっぽさが出ているといいんですが・・・でているのでしょうか？

次は死神様との駆け引きです。

？  
(前書き)

……すみません！

なんというか駄文です。

設定が生かしきれていないというか・・・

グダグダでもいいよって心の優しい方どうぞ。

？

健全なる魂は、健全なる精神と健全なる肉体に宿る。

死神武器専門学校《しにがみぶきせんもんがっこう》略して死武専<sup>しぶせん</sup>だ。

その生徒である「職人」と「武器」  
その義務とはただひとつ。

「99個の人間の魂」と「1個の魔女の魂」を武器に食べさせ  
死神様の武器である「デスサイズ」を作ることである。

少女に連れられ、ギロチンの鳥居が立ち並ぶ回廊を歩く。

なんていうか……趣味が悪いというか。

回廊を抜けると、鏡がひとつだけあるシンプルな部屋に出た。天井  
には青空。

別世界に移動したような感覚に陥る部屋だった。

そこには、真つ黒な装束を着ていて、髑髏の仮面をつけている人が  
いた。

ただし、人と言って良いのか、わからんが。

「ちーっす！」

ノリ軽っ！しかもしゃべるんだ。

「こんにちはー死神様」

「彼が、行き倒れていたという？」

「はい」

「ふーん。マカちゃんとソウルくんは、授業があるから、そっちに行きなさい」

「はい」

死神様に言われ、マカと呼ばれていた少女とソウルと呼ばれていた少年は、部屋を出て行く。

そして、その部屋には私と死神様と呼ばれる人と二人っきりになってしまった。

死神様は、こちらに近づいて、そして話しかけてきた。

「さてさて、君は一体何者だい？」

いきなりストレートに聞いてくる。

「何者と聞かれても……人間と答えるしかないと思うが」

それ以外にどう答えるというのだ。

英霊は、なんか違うし……受肉している時点で一応人間のくくりに入るのだと思う。

まあセイバーみたいな例外もあるから、なんともいえないが。

「人間？君が？」

疑いの目を向ける。

私だって、自分の置かれている状況がいまいちわかっていないというのに！

どう答えると！

「君は、人間じゃなくて、魔女に近い」

「魔女……」

この世には、魔女がいるのか。ということは、魔法が存在するということだ。もつとも、私の世界の魔法と同じとは、限らないが。

「それに……君の身のこなしといい雰囲気といい只者じゃないことくらいは解るよ」

一目見ただけで、解るとは……死神様と呼ばれるだけはあるのかもしれない。

それに、さっきから死神様からの視線で背中がむず痒い。

なんというか、あからさまに信用してませんよ。っていう視線だからだ。

という自分もそんな視線を死神様に送っているのだから、お互い様なのだが。

「とりあえず、自己紹介しようか。死神様だよー！君は？」

「私か？私はえ……いや、アーチャーだ」

「アーチャーくん。じゃあ特技は？」

「くん」づけで呼ばなくていい。特技は家事全般と機械いじりだな」

「それじゃあ死神チョップ」

「えっ！」

ガン！

警戒していなかったのか？と聞かれれば、もちろんしてたよ。って答える。

でも死神様の攻撃は軌道が読めなかった。反応はしたんだが……当たった場所はもちろん頭。

星が見えて、少しくらくらする。

「あつ……とりあえずそんなに肩肘張らなくてもいいからさ。もっと前向きにいこーよ」

「だからって、チョップはないと思うのだが」

「あーごめんごめん。なんかこの空気をぶち壊すにはそういったドッキリがないとね」

「……」  
涙目で思わずにらみ返してしまった。そんな理不尽な理由でなくられるのか。

「君が何者か。その問いはいいよ。これから、君をどうするかだけど……」

殺されるのだけは、勘弁だ。殺されそうになったら、必死に逃げる。殺されたら、イリヤに顔向けできない。

それだけ心に決めて、次の言葉を待つ。

「アーチャーくんはここで働いてもらいまーす」

「……いいのか？ 得体の知れない輩をこんな場所において」

思わず聞いた。

「あーうん。いいよ。来るものを拒まず、去るものを追わずといったところだからねー」

なんともものんきな神様。

見た感じは、優しさにあふれているが内に秘めている闘志は計り知れない。

敵に回すとやっかいな人物だ。

「君に衣食住を与えるからさ、君の力を貸して欲しい」

「……私はたいした力を持ってないぞ」

その言葉に、死神様は考え込み  
そして話始めた。

「実はね、君の事ある人から聞いてたんだよ。その人とは昔の知り  
合いでね。いろいろ話を聞いているから君がここにきたって聞いた  
ときあまり驚かなかったんだよね」

「ある人？」

「キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグだよーん」

「なんでさ!？」

名前だけなら、知っている。凜の師匠で有名な魔術師だからだ。

キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグと出会ったのは、運が良  
かったとしかいえない。

死神はいまでも覚えている。

死神は知っていた。この世界のほかにも平行世界が存在している  
ということ。

たまたま、宝石爺のゼルレッチと出会って、平行世界があることを  
確信した。

その人と意外とウマが合い、様々な知識の交換をした。



それ以来、ゼルレッチとは手紙友達みたいな存在だ。

そんな彼から連絡がきた。

君の世界に私の弟子の知り合いが飛ばされたかもしれない。

もし君の元へ来たのなら受け入れてくれないか？

そして彼のやりたいようにやらせてやってほしい。

君の敵になったとしても遠慮なくぶっ潰してくれたまえ。

それでも、対処できないようなら、いつでも私に連絡をしてくるといい。

初めは信じられなかった。異世界で平行世界のこの世界に人間を飛ばせるはずがないと思っていたから。

でもマカちゃんの報告で、彼がこの世界に来ていることを知った。

赤い服に白髪そしてこげ茶色の肌の男。

マカちゃんが連れてきた彼を見た瞬間確信した。

ゼルレッチの話は本当だ。だったらすることは一つ。

受け入れることだけだ。

「ゼルレッチのお弟子さんからの伝言を受けてるよー」

「凜から？」

「えーと《変なところに落としてごめん！うっかりが発動しちゃったみたい。その代わり、貴方がこの世界になじみやすいように、死神様にある程度話を通しているから。後はあんたが思うように生きなさい。それが桜の願いであり、私の願いでもあるんだから》とのこと」

「……はは」

思わず笑ってしまふ。凜らしい。

私は自分の思うように生きていくよ。桜、凜。

「死神様ありがとうございます。私の力で良いのなら貸そう」

？（後書き）

ごめんなさい。もしかしたらまた内容変更するかもしれません。

クロス小説は意外に難しいものだと思った。今日この頃です。  
名前はエミヤを隠し、アーチャーでいきたいと思います。

死神様のアーチャーくんはこのままでいきたいなと思ってたり。

そろそろ、マカやブラックスター、キッドたちに会わせたいです。  
でもまだ原作に入らないかも？

？  
**（前書き）**

最近微妙な話しかつくてない。  
オリジナルです。

？

この世界は、2種類の魂がある。

一つ目が善人の魂

二つ目が悪人の魂

死武専の生徒が集める魂は悪人の魂。

それは、何故か。

「鬼神」という化け物を生まないためにであった。

「それで、力を貸して欲しいということだが……」

死神様に聞く。

彼は力を貸して欲しいといった。

なにか問題が起きる、または起きているということだ。

「うん。君には死武専に入学してもらって、彼らの成長を見守って欲しい」

そういつて、目の前に現れる写真。

一枚目は、ツインテールの助けてくれた少女が写っている。

名前はマカ「アルバーン  
鎌職人で、現死神様のデスサイズの娘。

二枚目は、これまた助けてくれた少年の方が写っている。  
名前はソウル「イーター」  
彼はマカのパートナーで魔鎌だ。

三枚目は、水色の髪で私の強そうな少年が写っている。  
名前はブラック スター  
暗器職人で、星一族の生き残り。

四枚目は、髪の長いおとなしそうな少女が写っている。  
名前は椿  
パートナーはブラック スターで魔暗器だ。

五枚目は、髪の毛に三本線が入っている少年が写っている。  
名前はデス・ザ・キッド  
彼は死神で死神様の息子である。

六枚目は元気のよさそうな少女と少し大人びた少女二人が写っている。

名前はリズ・トンプソンとパティ・トンプソン  
パートナーはデス・ザ・キッドで二丁魔拳銃だ。

「ふむ。了解した」

その写真を死神に返す。

「もう転校手続きはしてるから。明日から宜しく!」

死神様は声のトーンが上がっている。

えっ？明日からなんですか？かなりいきなりだな！

「とりあえず、住む場所に案内していただけると嬉しいんですが……」

今日中に、街の把握をしておかないといけない。  
学校が始まったら、学校に拘束されるからだ。

「じゃ、ちょっと待ってて」

そっいつて、死神様はだれかを呼ぶ。

待つこと数分。

一人のショートカットの少女がこの部屋にきた。

「キム・デイルです。なんでしょうか？死神様」

「キムちゃん。彼を死武専のお泊り室に案内してあげて」

「彼は？」

「ああ、アーチャーくん。明日から死武専に通うことになったんだよ。家の用意が出来てないからさ。一時的にあそこに住んでもらうんだよー」

「はあ……わかりました。それじゃ、ついてきてください」

そういつて、少女は部屋を出ようとするので、アーチャーは振り返り一応死神様に一礼し、部屋を出た。

部屋に残っている死神はつぶやく。

「彼の存在がわれわれの世界にどのような影響がでるのか……」

ゼルレツチくん……これからがすごく楽しみだよ

部屋を出て、少女についていくと、お泊り室と書かれた札が見える。

「ここがお泊り室よ」

「ほう。簡易的なものだが、しっかりとしているのだな」

しかし、ご飯を作る場所がない。

「ひとつ質問していいか？」

「ん？何？」

キムは帰ろうとしていたところを引き止めて聞く。

「食事は？」

「ああ、もってきてくれるわよ。寮みたいなもんだから」

「そうなのか。ここまで案内してくれてありがとう」



お礼を言つと、キムは驚きながら

「死神様の命令だからよ」

そういつて、部屋を出て行つた。

トレースオン  
「構造把握」

死武専そのものの構造把握をする。

部屋の位置、ルート全てを把握し、頭に叩き込む。

そして、屋上へと向かった。

屋上に出て、初めに目に付いたのは、笑う太陽であつた。

太陽がワハハと笑っている。

不気味だがそういう世界なのだろう。

とにかく、アーチャーというスキルを保持したままなので、鷹の眼を持つている私は、町全体を見渡す。だいたいの構造はわかつた。

あとは、慣れだろう。

そろそろ、部屋に戻つた方が良さかもしれない。

アーチャーは屋上から去り部屋へと戻る。

そのとき女の人と入れ違った。

「ふふ、これからが楽しみだわ」

そう聞こえた。

アーチャーは振り返る。しかしそこには、女の人はいない。

「嫌な予感がするな」

アーチャーの胸に疑惑の芽を植えつけてこの日は終わった。

？  
(後書き)

土下座ものですかね。なんかテンポよく書けないんですよね。

次は原作介入開始です！

？  
（前書き）

原作介入開始です。

8 / 18 改定

？

鬼神とは、善人の魂を吸収し、力をつけたもののことを言う。

死神様が定めている、死神リストに載っていない人の魂を喰らうことで、鬼神となるのだ。

もう二度と鬼神を作ることがないように、作った施設が、

死神武器専門学校

通称死武専<sup>しぶせん</sup>だ。

マカはソウルと一緒に死神様の部屋へと向かった。

「みけんに女神事件」

自由の女神がみけん（・・・）に刺さって死んだという。

その被害者は前任のシド先生らしい。

しかし、最近死武専<sup>しぶせん</sup>に変な噂が流れている。

それは、「死武専」の生徒が変な男に狙われているという噂だ。

そしてボコボコにやられた生徒は犯人を目撃したらしい。

その犯人は、なんとみけんに穴の開いたゾンビだというのだ。

ギロチンの鳥居をくぐり、死神様のもとへ向かう。

すでに、ブラック スターと椿ちゃんもいる。（というより、鳥居の上でなんかしてたみたい）

「はいはい！ちーっす！ういっす！お疲れさん！」

「こんにちはー」

「おう！」

「用ってなんだ？」

「はい」

それぞれ挨拶をする。

「さてさて、本題に入るかな。君たちに、ちと受けてもらいたいものがあるんだがね」

「？」

何の話か見えてこない。

「補習だよ」

「ええ！補習って、あのお馬鹿が受ける補習ですか？」

「やだよ。最強のデスサイズになる俺が受けるものじゃねえ」

マカとソウルは反論する。

すると死神様は

「君たち、職人と武器の義務は？」

マカは答える。

「99個の人間の魂と1個の魔女の魂を武器に食べさせ、死神様の武器「デスサイズ」をつくることです」

「うん　でも君たち今日現在集めた魂！」

「0個じゃん！」

ソウルやマカは何も言えなくなり、ブラック　スターは笑い、椿は謝っていた。

「で、補習の内容はこの前まで死武専の先生だったシド先生の話……ゾンビ化して生徒を襲っているって話を聞いたりしてる？」

「ほら、言った通りだろ？」

「でも……あんなにやさしかった先生が……」

「うん。生きてるときはいい先生だったんだけど、ゾンビになって死からの恐怖が解放されてから、生徒に自分と同じ経験をさせてやるっていつてはた迷惑な授業という名の暴走をしちゃってるみたいなんだよね。しかもシド先生をゾンビ化させた何者かが裏で手を引いているのは確かだね」

「O・K！　まかせろよ！　ダンナ。そいつの魂をとってくりゃあいんだろっ？」

「はい！　そうゆつこと！　あつもしこの補習を落とすようなら、退学だからね」

「ええええええええええ!!」

「ほんじゃ！応援なんかしちゃってるからさガンバって！」

しばらくして、赤い外套を着た男が死神様の部屋へとやってきた。

「それで、好き勝手やってよいのだろうか？」

「もちろん ほどほどにね」

「……………で、どこで仕掛ければいい？」

「ここだよん」

「了解した。あの男は知っているのだろうか？」

「もちろん。じゃないと、意味がないからね」

赤い男      アーチャーはそのまま死神様の部屋を出て行った。

シド先生が出てくるといふ墓場まで来た。  
その墓場の名前はフックセメタリー鉤爪墓地

マカはいまだショックを受けたままである。

椿はそれを宥め、ブラック スターとソウルはシド先生を探しつつも好き勝手やっていた。



それを遠くから見ている一人の男　アーチャー！

この世界は、武器も意思を持った人なのだそうだ。

その二人が息を合わせて戦う。

せいはいせんそう  
聖杯戦争を思い出すな。

二人一組で聖杯を求め戦い合うあの忌々しい戦争。

感傷に浸っている間に、どうやら敵が現れたようだ。

マカは足を捕られソウルがカバーする。

出てきたのはゾンビ。

ふむ。実際に見ると、強烈だな。

「おはよう。こんにちは。こんばんは。お久しぶりデスDEATH　俺  
は挨拶をかかさない男だった」

「なんで！シド先生！」

「KILLコーンカーンコーン　まず、聞くより習え」

シド先生は攻撃を繰り返す。

すでに戦いの火蓋は切って落とされたのだ。

？  
(後書き)

次は、シュタインまで行きたいです！いろいろなオリジナルのお話を  
入れたらいいなと思います。

？（前書き）

おまたせしました！相変わらず文章がへたというか。

戦闘シーンをもっとかつこよく書くためには、きっとたくさんの本を読まないと難しいんだろうなと思いました。

8 / 18 改変

？

## 魂の共鳴

それは職人と武器の魂の波長を合わせるにより、武器の技がだせる。

一撃必殺の攻撃だ。

魂の波長とは、その人が持っている魂の形。

鬼神の卵と化した魂に攻撃を与えることの出来る唯一の力。

職人も武器もそれぞれ性格によって、魂の波長が異なるという。

職人と武器の相性が悪ければ、職人はその武器を使うことは出来ない。

また、職人も武器も心をもっている。

心が揺れれば、波長も変わるのだ。

アーチャーはひたすら、マカやブラック スターの戦いを見ていた。

マカは、先生という知り合い相手だからだろう。動きが鈍い。

マカを後退させ、その隙にシドは

「リビング・エンド  
十字落とし」

ブラック スターに攻撃を与える。

ふむ。どうやら手加減しているようだ。こちらの力に合わせて攻撃しているようだな。

「KILLコーンカンコンーン。授業も終わり……そろそろ死ぬか？」

そのとき、ブラック スターが起きて、シドに攻撃をする。

「オレ・オン・ステージだろうが！」

暗殺者のように、軽やかなステップ。攻撃に隙がない。

「三ツ星も一ツ星も関係ねエー！俺は！ブラックスター黒 星だあ！」

シドの鳩尾を狙ったの攻撃。なかなかいい攻撃だ。

が、甘い。一撃でやろうというのなら、もう少し左上に撃たないと昏睡にはならない。

シドは、ブラック スターの攻撃をよけ、マカに攻撃をする。

「リビング・エンド  
十字落とし！！」

マカは、その攻撃をわずかな隙間に入りかわす。

ほう。恐怖心を捨て去り、攻撃に転じる。すごい勇気だ。

攻撃が当たるかも知れない。そう考えるだけで人の動きは鈍くなるものだ。

その恐怖心に打ち勝ち次の手を考える。これが、戦場で勝ち残れる力となる。

面白い子たちだな。

「マカ！あれをやるぞ！『魂の波長』をあわせる！」

「！！でも、あれ一度も成功してないよ！」

「できる！俺たちなら！」

「『魂の共鳴！！』」

マカの力がソウルの力と混ざり合い、力が強くなる。

「行くぞ！鎌職人伝説の大技！ 魔女狩り（まじょがり）」

マカの鎌 ソウル自身が透明になり、透き通った大鎌となる。

「いッ！？」

マカが足を滑らせ必殺技と思われる攻撃はブラック スターの近くを通り、攻撃が外れる。

「何しやがんだー！殺す気か！」

ブラック スターはマカに文句を言う。

「私はシンプルに行きたかったのに！」

マカは、シド先生に攻撃するが、当たらずシド先生は地中へ潜る。

そのせいで、マカは反応できない。

が、ブラック スターの雰囲気が変わる。

「俺様のステージに上がんな。腐れゾンビが！暗殺者は二人もいらねえんだよ。俺が目立たねえ」

トランプスター  
「畏 星」

すると、ブラック スターが持っている鎖 椿の鎖が地面に張り巡らされる。

周りが無音になる。相手の気配をうかがい、出方を見ている。

ボコ

音をたてて、シドはブラック スターに攻撃をかけようとする。

トランプスター  
「畏 星発動！」

見事に、シド先生を捕まえた。もちろん、マカも一緒に。

それを見届けると同時に、アーチャーは動き出す。

「お前たちの力……見せてもらうぞ」

死神様と一緒にマカ、ソウル、ブラック スター、椿の補習を見ていた少年と二人の少女。

黒髪の左側には、白い三本線。

そう、死神様の息子のデス・ザ・キッドだ。

「ふーん。後は、シド先生をゾンビ化させた黒幕でしょ？誰なんだい？父上。只者ではないんだろう？」

「……」

死神は無言のままだったが、あきらめて話し始める。

「私の武器、デスサイズ君。彼を鍛え上げたのは、マカちゃんのお母さんだ。でも彼女は、二代目パートナーなんだよ」

「ということは、初代が？」

「そう初代パートナー、シュタイン君が今回の黒幕だよ」

「……」

「そして、彼は死武専（しぶせん）の卒業生の中でも最強の職人だった男だよ」



死神の答えを聞いたキッドの目がぎらつく。

「補習にしては、その課題……きつすぎるんじゃないかい？間違はなく、彼らは死ぬよ？」

シド先生から、ゾンビ化させた犯人を聞きだすのにひと悶着あったが、犯人が解った。

名前はシュタイン博士。場所はデスシティのはずれにある研究所だ。

「シュタイン博士ってどんなひとだろう」

つぎはぎだらけの研究所を見上げながら、マカはつぶやく。

どこにシュタインがいるのか、探していたときにいきなり扉が開いた。

そして、ガラガラという音が大きくなる。何かを運んでいる音のようだ。

マカたちは何が来るのか息を吞んで見つめた。

ガッン！

玄関のところで、躓きその瞬間

「ふぎゃあ！」

椅子の上から人が落ちてきた。その人の頭にはねじがある。

そこにいた全員の動きが止まる。

「クソ！まだ調子が悪いな！」

そういつて、ねじを回し始めた。

「OK！もう一度やらせてくれ」

そういつて、さっきの人は椅子をもつて中へと入っていった。

そして、もう一度椅子にのつて颯爽と登場していたが、やはり扉の段差でつまずき盛大にこけた。

「シュタイン博士、まだ調子が悪いんじゃないか？」

シュタインの研究室から、もう一人男が出てきた。

白髪で赤い外套の男である。

思わずマカとソウルは驚く。

「ん？死武専の生徒か？」

白い髪の男はたずねる。

「ああ！シュタインをとっ捕まえにきたってわけだ！」

ブラック スターは大きな声で言う。

「ふむ。そうか……ならば、ここから立ち去れ」

「雇い主無視で会話しない」

「良いだろう？私は好き勝手にいいという許しがあるのだからな。それに、見極めておきたいのだよ」

「全く……これだから堅物は困りますネエ？」

マカに話しかけるシュタイン。

マカは戸惑っている。

「シュタインを倒すなら、私を倒してからいけ」

赤い外套を着た少年はそういった。

？  
(後書き)

かなり変えました。

改変前と後どちら方が面白いでしょうか？  
コメントしていただけたら嬉しいです。

？  
（前書き）

遅くなりました！  
あまり進んでないですね。もっとテンポよくし  
ていきたい・・・  
8 / 18 改変

？

職人と武器はエレキギターとアンプ（スピーカー）の関係に似ている。

エレキギター（職人）だけでだせる音（魂の波長）はごく小さなものである。

しかしアンプ（武器）をつなげることによって「魂の波長」を増幅させ大きな力を出す。

でも、まれにギター一本（職人）だけで強力な魂の波長を出すことができる人もいるのだ。

「お前みたいなわけわからん奴に俺様は止められないぜ！ 椿！」

「はい！」

椿は武器に変身し、ブラック スターに加勢する。

ブラック スターはアーチャーに対して攻撃を行なう。

まずは椿を鎖鎌に変身させる。

鎖を使いアーチャーの動きを止めようとする。

しかし、アーチャーは避け、ブラック スターの後ろを奪う。

そして、干将莫耶<sup>かんしょうもぎや</sup>を突きつける。

「甘いぞ。そんなんではすぐ死ぬ」

「チッ！お前……俺以上に目立ちやがつて……」

ブラック スターは舌打ちをして、椿を煙球に変身させ、煙を炊く。その瞬間に足払いをし、アーチャーから距離をとる。

アーチャーは、体勢を崩され少し驚いた顔をし、煙から逃れるために後ろに下がる。

そう見せかけ、マカに攻撃するために近寄る。

それに気がついたソウル。

反応は良いようだ。

ソウルは武器に変身し叫ぶ。

「マカ！！気をつけろ！来るぞ」

「えっ！？うん！」

干将莫耶<sup>かんしょうもぎや</sup>の攻撃を受けとめる。

「ほっ……」

少しはやるようだ。昔の自分以上ではあるな。

今までの戦闘経験によるものか。

マカは鎌を振る。

それを避け干将莫耶かんしょうはくやを振り下ろす。

しかし、右腕に椿の鎖が絡みつく。その瞬間を狙いマカはアーチャーの体勢を崩し、鎌で攻撃する。

「やるな」

紙一重のところで避け、椿の方を見ると、ブラック スターがいな  
い。

「俺はここだよ！」

そういつて、掌底ていとうに魂の波長を込めてアーチャーに打ち込む。

「黒星こくせいビッグウェーブ!!」

アーチャーは吹っ飛んだ。

意識が飛びそうになる。

体中がずきずきする。

バーサーカー戦をしたときみたいに……

「いや……あの時よりはマシか」

魔力は殆ど防御に回した。



体を強化させ、ダメージを減らす予定だったが、あの攻撃は相性が悪かったのだろう。

それに、攻撃を受ける瞬間嫌な予感がしたから、なるべく致命傷にならないように全力で回避したが、それでもかなりのダメージだ。

魔力と似た力を使っていた。

あの攻撃には注意しておかないといけないな。

「あらら……用心棒の彼がやられちゃった。さーて、ある程度データも取れたし、俺の番か」

動かなくなったアーチャーを見てシュタインはそういう。

「俺の魂が欲しいんだろう？実験を始めましょうか」

マカは、赤い外套の男を見つめていたが、シュタインと向き合い、話しかける。

「なんで、死武專の生徒を襲うの？何かうらみでもあるわけ？」

「別に……動機はいたってシンプルですよ？”観察”と”研究”ですから。ただそれだけです。この世の全てが研究材料……もちろん、俺自身もね」

椅子に座り、へらへらした様子で、ソウルとマカを見て言う。

「君たちの魂はズいぶん魂の波長が安定してないネエ……ひねくれ者で皮肉屋な魂とまじめで頑張り屋さんな魂　　共鳴しているようで、していない」

「何！？生きている人間の魂が見えるのか！お前、職人！？」

「しかも性質まで見抜けるなんて、超一流の職人よ！」

次に、ブラック　スターを見て、笑う。

「君はすごいなあ……ものすごく自己主張の激しい魂ですね」

その言葉を言い終える瞬間にブラック　スターはシュタイン博士に攻撃する。

しかし、シュタインはそれを片手で止める。

「君のような魂に合う武器は、<sup>パートナー</sup>なかなかないんじゃないのか？」  
椅子を回転させ、攻撃を上手く流す。

そして、ブラック　スターがよろけたところを、シュタインは足を攻撃し、シュタインの攻撃が入る。

「ブラック　スター！」

椿の叫び声と同時にブラック　スターは遠くへ飛ばされた。

「ああ！なるほど、君が彼のパートナーだね？協調性が高く人を受け入れる器が大きいね。君が彼の「魂の波長」にあわせているのか」

シュタインはちらりとアーチャーを見てつぶやく。

「彼も面白い事実が発覚しましたし……さて、本格的に始めますか」

マカもブラック スターもシュタイン博士に攻撃しようとするが、当たらない。

逆にシュタイン博士の手の内で踊らされているようだ。

シュタイン博士の掌底は自分の魂の波長を相手に打ち込む。

ブラック スターも同じことが出来るが、魂の性質を理解しているシュタインには、全く効果がなかった。

そして、ブラック スターは、シュタイン博士に魂の波長を打ち込まれ倒れた。

「ブラック スター！」

椿はブラック スターの元へと行く。

「シュタイン！てめえー許さねえ！マカ！気合入れていくぞ！」

ソウルはやる気だが、マカの方は

「うそ……」

「どうした！？」

「見えちゃった……」

敵に萎縮してしまっていた。

「フフ……魂が見えたようだね」

シュタイン博士は、タバコを吸いながら、そういう。

「そんな……レベルが違いすぎる」

戦意喪失。これでは、勝てる戦いも勝てなくなるといふもの。

ソウルが必死にマカに活を入れている。

「お前が見えたのは魂だろ！未来が見たわけじゃねえ！戦つ前からあきらめてどうすんだよ！マカらしくねえだろう？」

「そうだね……ごめん、ソウル。手間かけさせた」

「アイヨ」

「「魂の共鳴！」」

マカは復活したようだ。ソウルを使い魔女狩り（まじよがり）を發動する。

「来い！お前らの魂見せてみるよ！」

「魔女狩り（まじよがり）！！」

このまま押し切るかと思っていたが、シュタインは、せまりくる魔女狩りを受け止めたのだ。

マカもソウルも倒れる。

そこにシュタイン博士が近づく。

「俺の職人に手出しさせねえーぞ」

ソウルはマカをかばいながらいう。

そしてシュタイン博士は

「それでは、君から           合格点を上げましょう。補習授業おしまいでーす」

そう言った。

？  
（後書き）

ここまで読んでくださり有難うございます。

？  
（前書き）

遅くなりました！ 難産ですねー

8 / 18 加筆修正

？

死神

世界の秩序を守るため、鬼神へとなりえる魂を持つもの（悪人の魂）リスト化し、

自ら設立した死武専の生徒および世界中に点在するデスサイズたちによって、

その粛清を執り仕切っている。

私以外は軽傷で、ドッキリ補習ですということを伝えたと、マカたちは安心していた。

まあ、私は重傷なので、少々入院する羽目になった。すぐに全快したのだが……

もちろん、その後マカたちにも自己紹介をした。

「はじめまして、じゃないけど、私は鎌職人のマカ＝アルバーン。マカって呼んで。それで彼が、私のパートナーのソウル」

「武器のソウル・イーターだ。よろしく」

「俺様は暗器職人のブラック スター！好きな言葉は天上天下唯我独尊！嫌いなものは俺様より目立つもの！そして俺様は神をも超える男になるのだ！はーはははー！」



「ブラック スターの武器で椿といます。よろしくね」

「私の名前はアーチャー。好きなことは家事と機械いじりだ。宜しくたのむ」

「ところで、アーチャーは、何でシュタイン博士の用心棒なんかしていたの？」

「死神様が、死武專に入りたいのなら、シュタイン博士を守れって言われたからな」

「えっ？ そうなの？」

「そうなのだよ。試験でな。一応合格らしいが」

「そんな試験しなかったけどな  
ソウルは言う。

「中途入学だから、そうなのかと思っていたのだが……違うのか？」

「うん。大体テストだし……」

マカはうなずく。

「まあ、合格したからいいさ」

実際は、私が無理を言って戦わせて貰ったのだが……

その代わり死神様に呼ばれ様々な任務をさせられた。

なんというか……便利屋じゃないんだがな……

任務をしていて、様々なことを知った。

この世界のこと、悪人の魂について、魂の概念についても。

それから魔術を人前で使うことを避けるために、固定武器を作った。

もちろん、それをいれるホルダーも作ったぞ！手作りだ。

作った武器は干将莫耶<sup>かんしょうばくや</sup>。

任務終わった日はそうとう体力を使うのか、死んだように寝ている。

魔力の消費が激しいのかもしれない。

「死神様報告します」

シドは死神様の部屋へと来ていた。

報告の内容は、謎の青年アーチャーに関することである。

アーチャーがこなしてきた任務の結果と彼の戦闘能力について、詳細に書かれたプリントを死神様に渡し、シドは説明を始める。

「彼の戦闘能力は、三ツ星職人も凌ぐ強さです。状況判断・戦闘能

力共にかなり高いですね」

「そつだろつねえ」

「死神様は何か知っているんですか？」

「まあ、ちよつとね」

言葉を濁す死神。

シドは話を続ける。

「そうですか。あと彼の武器なのですが……」

「彼は意思のナイ武器を使うんでしょう？」

「はい。彼は鉄の塊と言っていました。彼の武器は、一般の人の農具と同じ材料で出来ているのだと思います。基本的にはそういった農具は悪人の魂には攻撃が通らないのですが……彼の攻撃は悪人の魂にも有効なようです」

「ふん。彼の武器には、なんらかの秘密があるということだね」

「死神様……彼は一体何者なんでしょうか？」

「彼曰く、人間って言ってたよ」

「彼が人間ですか？こんなに凶暴な戦闘能力に、魂に直接攻撃できる鉄の武器を持つ彼ですよ！」

シドは驚きながらも、死神に問い詰める形で聞く。

「まあ、彼はイレギュラーというか。魔女みたいな存在っていう認識でいいんじゃないかな」

そう、死神は信用はしているが信頼はしていないのだ。

死武専 左右対称で、蠟燭が突き刺さっていたり髑髏が掲げてあったり、城みたいな学校だった。  
その正面入口で二人の少年がいる。そう、一人はブラック スター  
もう一人はソウル「イーター」だった。

「今日俺は、暗殺をしないとイケない奴らがいる！」

「へ〜……」

ブラック スターの決意を流すように聞くソウル。

「今、死武専で持ちきりの噂が二つある。一つ目は、死神のダンナの息子が入学するらしい！もう一つは無償で困っている人の手助けをしている赤い服の男 アーチャーの話だ！俺様の噂以外で盛り上がるのは許さねえ！」

「ああ、お前はそういうやつだ……って最後の噂か？」

そう、アーチャーの話は本当の話である。

実際、ソウルも何回かアーチャーが他の人の手助けしているのを見

たことがある。

ブラック スター的には、噂だろうがなんだろうが目立たれるとム  
かつくわけで……

「噂じゃなくても、俺様より目立とうなど言語道断！」

「あっそう……」

「それにしてもドラ息子と似非紳士はいつになっ たら来るんだ！も  
う3時間も待っているんだぞ！」

ブラック スターは怒り狂い、ソウルは寝ていた。

そんな時

「死神様も酷い。いきなり朝呼び出したかと思えば、任務いつて  
こいだもんなあ……元サーヴァントとはいえ受肉してるんだから、  
もう少し配慮……ってお前らなぜここにいる？」

授業中のはずだよな？ そんな疑問をつぶやく。

「なぜって、死神様の息子が来るっていうから……」

ソウルの話の聞いている途中で、後ろの方から声がする。

一人の少年と二人の少女がこちらに歩いてくる。

「うむ すばらしい！さすが父上の学校。見事な左右対称だ」  
シンメトリー

「おお！ あんたらが噂の息子さん一行？」

どうやら、彼が死神様の息子らしい。

「やっぱ、親の七光りつてのはエライのか？俺もあやかりたいですよー」

「ん？何……？七光りだと？」

喧嘩が始まるのかと思えば、

「7はよせ！8にしろ！」

「へえ？はあ？」

「7は半分に切っても左右対称にはならん。でも8はどうだ？縦に切っても横に切っても完璧な左右対称シンメトリ」

「はあ……」

「7はよせ……8にしてくれ……たのむ……」

キッドはうなだれる。

「彼は大丈夫なのか？」

思わず近くにいたりズヤパティに聞くアーチャー！。

「きゃははは」

「イヤ……だめだよ。かなり」

「ひゃっはぁー!!」

声のするほうを見ると、ブラック スターがいる。

この学校の正面入口には髑髏のマークに針が出ている装飾があり一度一人、人が立てるくらいの広さがある高い場所。まあ、好んであんな場所に立とうとする人は居ないがそこにブラック スターが立っていた。

「俺より目立とうとするやつは誰であろうと許さねえ！ヤイ死神の息子とアーチャー！俺はお前たちを暗殺する！そして明日のウワサはこうだ」

やっぱりねえ！。ブラック スターは遂に神をも超越した！つとな！  
天上天下唯我独尊！！明日の俺には後光が差すだろう！

そう言い切った瞬間装飾部分が壊れ、ブラック スターは落ちる。

シンメトリー  
左右対称をぶち壊されたキッドは悲鳴を上げる。  
ブラック スターはというと、きちんと着地し、

「偉大なる俺様の存在に耐えられなかったようだな」

なんて言っている。

「よくも、シンメトリー左右対称を！リズ、パティ！銃に変身しろ！」

怒り狂うキッドに銃に変身するリズとパティ

「売られた喧嘩は買っぜ！なー？ソウル」

「えっ？売ったのお前だろ？……何これ？俺も？」

「なんなんだ、一体」

アーチャーはついていけず、このまま逃げようかと思った瞬間、  
ブラック スターが気がつき、

「アーチャー！お前も参戦しろよ！男が廃るぞ？」

「なぜ、巻き込む！」

「一度、お前と戦って見たいと思ってたからな」

「意味のない戦いはしない主義だ」

「えっ？そんなこといったて……まさか？怖いのか？」

「……………」

見え透いた挑発だ。それに乗る私ではない。

「虫唾が走るわ！お前ら全員処刑だ！」

キッドは怒り狂っているので、全てが標的だった。

銃の乱射。それをよけるアーチャー、ソウル、ブラック スター。



ソウルは隙を見て攻撃をしようとするが、見破られ攻撃を食らう。

「くそーいつてー」

そう、武器本来の攻撃力と魂の波長を合体させ攻撃する。

そうすることにより、悪人の魂にも攻撃が通るというわけだ。

それが死武専生の戦い方だ。

アーチャーもよけるが、一発だけ腕に当たる。

「くッ!!」

かなりの衝撃だった。腕に穴が開くかと思うくらいの痛み。

ソウルも当たっていたのに、このようなダメージではなかった。もつと軽かった。

でも私の場合は……そうか、あの魔力に似た攻撃か。

「やはり貴方は魂の波長攻撃に弱いんですよ」

後ろを振り返ると、マカ、椿そしてシュタイン博士がいた。

？  
（後書き）

読んでくださり有難うございます。

？  
**(前書き)**

オリジナルが少し入ってます！

あと文章少なくてごめんなさい。

？

「なぜここに？」

「ああ、職人同士の決闘は教職員が立ち会わなければならないという規定になっているからですよ」

「おかげで、私たちも来る羽目になったんだよねー」  
「シュタイン博士、ほんとうにすみません」

そうか、それでマカも椿もいるわけだ。

キッドとソウル、ブラック スターは相変わらず戦っている。

「君の体はどうやら、魂の波長攻撃に弱いようですね」

「そう、それってどういうことなんだ？」

「そうだね……先日から、魂が見えるようになったマカさん。君に特別授業」

「えっ？」

突然話を振られ驚くマカ。

「そんなに気を張らずに……簡単な質問です。あそこで戦っているキッドさんと武器の二丁拳銃 彼らの魂の波長はばっちり合っていますか？」

「はい……普通は2つの武器と魂の波長をあわせるのは非常に難しいですが、とても安定しています。お互い尊敬しあっている……いや、違うなあこがれ？ですか？」

「そう、正解です。二丁拳銃トンプソン姉妹……彼女たちはストーリートで育ってきた生い立ちからキッドくんのような気品のある魂にあこがれていて、逆にキッドくんは神経質な自分と違うおおらかでポジティブな魂のトンプソン姉妹にあこがれをいだいています」

「だけど……ソウルとブラック スターは……」

ブラック スターがソウルを使おうとしてはいるが、ソウルを持ち上げられない。

「あれは、典型的な魂の波長が合っていない状態だ」

そう、魂の波長が合わないと職人は武器を使えない。

そしてソウルに対して魂の波長を打ち込んでしまうという状況になっていた。

「相手の魂の波長を感じられてないんだ」

「職人と武器は敵と戦う前にパートナーの魂と向き合わなければならない」

「それで、私が魂の波長攻撃に弱いのはなぜなんだ？」

「ああ、忘れてました。君はいま、まさにソウルくんやブラック スターくんと同じ現象が起きているというわけです」

「はあ？」

「武器や職人はお互いに魂の波長を感じ合い、魂の波長を使って敵に攻撃できたり、逆に敵の攻撃を防いだりすることが出来る。ただ君の場合、その魂の波長が使えていないからそういった攻撃に弱い」

「それでは、魂の波長が使えるようになったら私も耐性がつくということがあるか？」

「そうなると思うよ」

魂の波長を使う。そんなことが出来ればいいのだが……

魔力と似た力か……魔術の才能はゼロの私に使うことが出来るのか？

やはりそこは、敵の攻撃を受けずに敵を倒すという戦法に変えたほうがいいのかもしれない。

体を鍛えなおすしかない。

アーチャーはそう心に決めて、彼らの戦いを見ていた。

結果は、一応キッドの勝ち。

のはずなのだが、ソウルがキッドの髪を少し切ってしまい、キッドはそれにより精神崩壊を起す。

最後の最後で一撃必殺のデス・キャノンを撃つがそのまま倒れてしまい、ソウルやブラック スターにとっては引き分けという事で、ひと段落したらしい。

キッドは、一ヶ月ほど学校を休み、その後はカウンセリングを受けながら学校に通うはめになったそうだ。

そんなことになるとは、俺たちはまだ知らない。

「あのーシュタイン博士」

キッドVSソウル、ブラック スター戦の時にマカはシュタインに話しかける。

「ん？なにが質問か？」

「アーチャーの魂なんですけど……なんていうか……ゆがんで見えます」

「ゆがんでいる？」

「はい、違和感があるとかはいえないんですけど、あれはアーチャーの魂じゃない気がします。魂の後ろに赤い魂があるみたいに見えます……」

「ふーん。そうね……」

シュタインには少しわからない。違和感というのは解るが、彼の魂が赤く見えたことはない。

もしかしたら、彼女はソウルプロテクトを解除するほどの魂感知能

力があるのかもしれない。

これは死神様に報告かな？

そんなことをシュタインは考えていた。

今日も学校日和！

いつものように鍛錬し、部屋を掃除して朝食を作り、一人で食べて学校を出る。

死神様から給料？ばいものが支給されるようになったので、めでたく寮をでた。

立地はなるべく目立たないような場所で森があり、そして死武専から近いところにした。

簡単な一戸建てを購入したのだ。

お金？もちろん宝石を精製して……ごほん。

死武専での働きもあるが、個人的に様々なものの修理を行なったりする何でも屋的なものを行っている。

お金がない人には、タダで！　ありそうな人には、ぼったくれ！　を精神に行なっている。

もちろん、昔の俺とは違って、全てのことを善意でやれるほど、出来た人間じゃないからな。

おっと、素がでていたようだな。



とりあえず、一戸建てが出来るほどのお金を……  
言っとくけど、買ったのは土地だけだからな。

あとは全部私が作った。

もちろん魔術師の工房……衛宮士郎時代で言う土蔵だ。  
大体の構造は全部一緒。ただ、他の人には解らないようなつくりにはなっているがな。

魔術の鍛錬も忘れない。まあ死武専の任務をやった後に鍛錬なんかするとぶっ倒れているのがここ最近の私の生活だ。

どうも魔力消費が激しい。

一応、毎日干将莫耶かんしょうばくやを投影している。

投影の出来は、それなりなのだが戦闘した後に投影しようとするとな  
出来が悪くなる。

戦闘で剣にも防御にも魔力を使っているからなのか、魔力消費が激  
しい。

干将莫耶かんしょうばくやを投影するのに必要な魔力はそんなに要らないはずだ。

それなのに、この魔力消費は……

燃費の悪い車と一緒に？

考えられる原因として私の魂を中心に魔力が注入されていると言う  
ことだ。

まるで何かをカーテンで隠すかのように……

私の体なのに、何も解らないんだな。なんて思っていたら、いつの間にか時間がたっている。

ヤバイ！工房を封印して隠せるものは全て隠す。

もうすぐ、マカやソウル、ブラック スター、椿、キッド、リズ、パーティが私の家に来る時間だ。

？  
(後書き)

続きますよ！

オリジナルに突っ走りますよ！！

次の話はもう少しお待ちください。

？  
(前書き)

遅くなりました！

そしてお待ちせしました！(誰も待っていないだろうけど！)  
相変わらず文がおかしいです！

？

なぜ、このような状況になったのかというと……

〈回想〉

学校生活にも慣れてきたころ、死神様に呼ばれた。

もちろん、任務の話かと思っていた。

死武専の生徒は課外授業は基本的に掲示板で選んで受付に申告するというのが道理である。

しかし、アーチャーの場合死神様から任務を貰うことが多い。

それだけ、重要度の高い任務をやらされているということなのだが

……

アーチャーは気がついていない。

それはさておき、いつものように死神様に呼び出され、死神様の部屋へと向かう。

途中で、マカやソウルと合流した。

「あれ？アーチャーも呼ばれたの？」

「ああ、そうみたいだな」

「珍しいもんだな」

「本当にそうだね。アーチャーって授業にいつもいないから……」

それは死神様の任務を請け負っているからです。  
と言おうとしたら、死神様の部屋へとついた。

部屋に入り、相変わらずなギロチンの鳥居を抜けて死神様のところにたどり着いた。

「おーこんちわ！元気にしてるー？」

「はい」

「おう」

「……」

「もう少ししたら、揃うと思うけど……」

しばらくすると、キッドとパティ、リズそしてブラック スター、椿が到着した。

「はい！揃いましたね！それでは特別授業を言い渡します！」

「特別授業？」

「そうなんだよねー！色々考えた結果、君たちでチームを組んでもらおうと思ってさ」

「チームですか？」

「そうそう、それで戦闘能力向上と交流をかねて、特別授業をしてもらうことにしたのさ！」

みんな驚いている。

「基本的には、バラバラで動くけど、チームでどこかへ行くってことになったら、この面子が一番相性がよさそうだからね。チームで動くって事も学びなさいってことで！」

無理やりな気がするが、皆納得したようだ。

そして、死神様はとんでもないことをいったのだ。

「特別授業は、アーチャーくん任せから！アーチャーくんの方に集合！強化合宿をしちゃってよー！」

「ええええ！？」

「聞いていないのだが？」

冷やかな目で死神様を見る。

しかし、死神様は無視をする。

思わずため息が出た。

死神様が私の家の場所を書いた紙を他の皆に渡して、

「それじゃ、一時間後にアーチャーくんの家に集合ね!」

そういいやがった。

みんなが、死神様の部屋を出て行ったのを確認し、死神様に問い詰めた。

「何すればいい?そんな急に言われても困る」

「だーかーらー言ったでしょ?戦闘能力向上。もちろんシュタイン君も行くから安心して」

「いや、困ります」

「まあそついわず……君の戦闘能力は高く買っているんだから」

「……むっ」

「彼らも自立するからね。その手助けだと思ってやってちょうだいな」

「……」

「それじゃ!よろしくたのんだよ」



死神様にはお世話になっているし（一応）仕方がない。

やるときはやる私だ。

家の掃除をしていたら、鈴になる。

一応、この家には魔術で結界を張っている。

無断で入ろうにも入れない仕組みになっている。

魔法を使うものもいるしな。私の魔術を秘匿する意味でも、結界を張った。

ちよつと、異世界の物もあるから、簡単に入れないようにしているのだ。

「着たか」

そして、チャイムになる。

「今行く」

初めに来たのはマカとソウルだ。物珍しそうに私の家を見ている。

「こんな家初めてみたかも」

「ああ」

確かに、洋風の家ばかりで、和風な家は見かけたことがなかった。

次にきたのは、ブラック スターと椿だ。

椿は、自分の家に帰ったみたいとはしゃいでいる。

ほう、一応和風の家もこの世界には存在しているのだなと改めて思う。

最後に来たのはキッド、リズ、パティだ。

和風な家は初めてのようで、特に畳がお気に入りのようだ。

「美しい……」

シンメトリーな畳がすきなんだそうだ。

よく分かんが。

何をしようかと悩んでいたら、シュタイン博士も到着した。

「ここが、アーチャーくんの家ですか」

じろじろと見る。

こいつ相手だと、ボロが出そうだ。とりあえず、修行の場所として、森に案内した。

「ここなら、思い切ってやってもいい」

道場も作ってはあるが、武器を使うとなれば外のほうがいい。家を壊されたくないからな。

「そうだね。まずは、アーチャーくんと三人で模擬戦闘をしてみよう。ただしアーチャーくん一人だから、魂の波長攻撃は禁止ね！どんな手段を使ってもいい、アーチャー君を叩きのめす。それが今日の修行だよ。アーチャー君は逃げてもいいし逆にやってもいい」

「へえ？アーチャーは弱いだろ？なのにこんなことするのかよ。俺は一人でも全員討ち取れるぞ」

ブラック スターはそういう。

「そうだな。オレたちもキッドたちと力をあわせなくてもいいんじゃない？」

ソウルも言う。

「おやおや……アーチャーくんはだいぶ下に見られてますよ？雑魚扱いですよ？」

「それは挑発しているのか？」

「まあ簡単に言えば、そうですね」

「こいつら相手に本気出せるか」

思わずつぶやくアーチャー。私にだって信条はある。それに子どもだとやりにくい。

「なめてかかると痛い思いしますよ」

たしなめるように言うシユタイン。

「制限時間は一時間。そうですね、負けたほうは私の実験台になってもらいましょうか？」

イヤだ……それだけは勘弁して欲しい。

「それでは、開始です」

？  
(後書き)

もう少しオリジナルが続きます。  
これが終われば黒血編をはじめますよ！

？  
**(前書き)**

なんとか、オリジナルを・・・

文章が相変わらずむちゃくちゃですが・・・  
どうぞ！

？

どうやら、三人は協力せずに攻撃してくるようだ。

チームで来られると、対応しきれるか心配だったが、これなら簡単に流せそうだ。

まずは、マカとソウルが攻撃してくる。

それを右に避け、右から攻撃をする。

きちんと反応して、防御体勢になる。

「ちっ！」

「くっ！」

マカは攻撃体勢に戻し、鎌を振る。

どうしてもタイムラグがある。

その隙に左により、攻撃を避けて、左から攻撃する。

「きゃあ！」

「マカ！」

マカの弱点は、左からの攻撃だ。

あと、鎌を振り回すためのタイムラグを何とかしないといけない。

「ふむ……」

「ハーハハ！マカもまだまだだな！俺の攻撃を受けてみる！」

今度は、ブラック スターと椿だ。

鎖鎌を投げてくる。

「ほう」

タイミングもいい、しかし攻撃を宣言して攻撃するので、簡単に避けられる。

「ひゃほーい！」

椿は忍者刀になり、ブラック スターは攻撃する。  
気配を消していないので、軌道が読める。  
ヒット&アウェイで、攻撃を入れていく。  
ぎりぎり避けているが、避けるのにも体力を使う。  
少しは、ダメージがあるはずだ。

「ちっ！」

煙球を使う。

あたりは真っ白になる。

「無駄だ」

目を閉じる。どこに誰の気配があるかを瞬間に察知する。

ブラック スターの方へ干将莫耶かんしょうばくやを投げる。

「くっ！」

煙が収まると、ブラック スターは干将莫耶かんしょうばくやで動けなくなっていた。  
ブラック スターの服をそのまま木に縫い付けるように干将莫耶かんしょうばくやが



刺さっていた。

「……」

アーチャーはブラック スターに近づき、ブラック スターの鳩尾を殴る。そして干将莫耶かんしょうばくやを木から外す。

バン

木に銃痕がつく。

振り返ると、キッドがいる。

「次は、お前か？」

「……そうだ」

キッドは、アーチャーの動きを見ていた。

戦闘能力は、自分以上だと判断した。

三人一緒に連携しないと倒せるかどうかわからない敵。

「これは、ヤバイな」

「キッド……」

「リズ、パティ、行くぞ！」

「「おお！」」

アーチャーを狙うように撃つ。しかし攻撃が当たらない。

森の中へ逃げてしまったから、木が邪魔で狙えないというのもある。そんなのは、言い訳に過ぎない。

「ちっ！」

「甘い。敵の行動を見て、先読みして攻撃しなければ、当たらないぞ」

先読みしながら、攻撃しているが、相手の速さについていけないのだ。

数撃では当たるかもしれないが、連射するほど弾がない。

どうする。

目の前にアーチャーがいる。

銃で連射して、近づけさせないようにするが、全部避けられる。

「くっ！」

接近戦に持ち込まれた。相手は、剣で自分以上の力量の持ち主だ。

攻撃するが、全部避けられるのだ。

「覚悟！」

マカの鎌がアーチャーを襲う。

アーチャーは驚いた顔をして、マカの攻撃を避ける。

「ようやく復活か……」

アーチャーは笑っている。

「キッドくん、ここは三人で協力しないと！アーチャーには勝てない」

「ブラック スターは？」

「さつき、起した。大丈夫三人でやればうまくいくはず！作戦を簡単に教えるね」

「攻撃がやんだな」

マカの攻撃を避けたアーチャーは一人そうつぶやく。

「三人で協力してくるのか？」

あと少しで、一時間たつ。これを凌げれば引き分けに終わらせれば、誰も実験されることはない。  
ため息をつく。

実験と言うと、いい思い出がない。

凜にされてきた実験の日々を思い出すと、涙が出てくる。

あの時は、死ぬかと……

そんなことを思っていたら、

「見つけた!」

「俺より目立ちやがって!」

マカとブラック スターが同時攻撃をしてくる。  
前回と同じで、鎖をアーチャーの右腕に絡ませる。

「うりゃあ!」

マカは鎌を振る。

上手い具合に避けてマカから離れようとするが、鎖があつてうまく逃げれない。

「ほう……やるな」

それを狙ったように、キッドの銃が発砲される。

「ちっ!」

アーチャーは空へと飛ぶ。

「えっ!」

空中に避けられると思っていなかった、マカは驚く。

「空中では、避けられんぞ!」

キッドは続けて発砲する。

アーチャーに当たったかのように見えたが、それは目くらましだった。

服を上手く使い、身代わりにしたのだ。  
そのまま、ブラック スターに近づく。

「な！」

そして、鎖を解きそのまま、ブラック スターに攻撃をする。  
それを上手く、防御するブラック スター。

「そこまで！」

シュタインの声が聞こえた。

「結局どうなるんだよ！」

ブラック スターは不機嫌そうに言う。

そう、中途半端なときにとめられたので、罰ゲーム……博士の実験  
体になるというのは、どちらのチームがやるのか……

「それは、引き分けなので、まことに残念ですが、どちらもなしです！」

みんな一斉に安堵した。

「これから、個別でトレーニングを伝えますから、やってくださいね？」

それぞれ、やらないといけないことを伝えているようだ。

「アーチャー君は、今日はもういいです。彼らの精がつくものでも作ってください」

「……本当に合宿する気だったんだな。了解した。美味しいものを作って待つておこう」

その日の夜は、和食で、創作料理を作った。  
久々に色々なものを作った。

目の前に出された料理を見て、その場にいた全員息を呑んだ。

「これ、全部食べていいの？」

「まさか、見た目だけとかは、ないよな？」

「凄い料理ばつか……」

「うまそー」

シンメトリー

「左右対称な料理ばかり！」

「食べていい？食べるぞ！」

「すごい・・・」

「食べてみる。おいしいから」

皆で食べる料理はおいしい。

アーチャーになってからは、忘れていた幸せ。

「アーチャー君の特技ですか？」

「嫌味か？」

「いやー立派な特技ですよ」

「……やっぱ嫌味にしか聞こえん」

「あっそうそう、明日は死神様から任務を押し付けられると思うから、頑張ってくださいね」

「は？」

「朝早く、死神様のところへ行ってください」

「……了解した」

そして、夜は更けていった。

？  
**（後書き）**

次から黒血編です。

とうとう、本編進めていきます！



？  
**(前書き)**

黒血へん開始です！うまく文章に出来ないこのごろー

少し修正 9 / 12

？

いつものように、朝早く起きて軽く鍛錬を行い朝食を用意する。

今日は死神様に呼ばれているので、早めにマカたちを起し、朝食を食べさせる。

ブラック スターもパティもおかわりしまくって、思った以上に時間をとられた。

まあそれは置いておき、皆と一緒に学校へ向かい途中分かれる。

死神様の部屋へとやってきた。

「お疲れさ〜ん」

相変わらずな死神様。

「それで、任務は？」

死神様が私を呼ぶ理由は一つ。任務があるときだけだ。

「まあそう、肩肘張らずにね〜！力むと成功しないよ？」

「縁起の悪いことは言わないで頂きたい」

「んーそうだね。じゃあ、これよろしく！」

そうやって渡された一枚の紙  
私は早速目を通した。

「エメラルド湖殺人鬼ソソソソソ！お前の魂頂くよ！」

いつものように課外授業を終わらせたマカとソウル。

「おう！三つ目の魂、クールに頂きます」

「ねえ？ソウル、魂っておいしいの？」

「ああ！うまいぜ！別に味はないけど歯ざわり、とくに喉ごしがたまんねえー」

「昨日のアーチャーの料理とどっちがおいしい？」

「んー味から言えばやっぱりアーチャーの方が美味しいけど、やっぱり満足感は魂の方が強いな」

「ふーん……そうなんだ」

「んじゃあ、バイクまわしてくるわ！下で待ってる」

「待って、ソウル……あの教会」

「観光なら別の日にしてくれよ？」

「違う！この感じ……教会から武器と職人の魂反応が一つずつ……それを取り囲むように人間の魂が50〜60……」

「そこまで解るのか？」

「こんなの初めて……何か嫌な予感がする。ソウル、行きましょう！」

「たくー仕方がないな」

そういつて着いた場所はサンタ・マリオ・ノヴェラ教会  
マカの体が反応する。

「どうした？」

「うそ！！そんなことありえない！」

「どうした？」

「消えた……5、60あった魂が全部消えた。死武専生としては、  
見ておかないと……」

そして、マカは扉を開いた。

中には一人の人間がいた。

アーチャーも帰る途中だった。

しかし、急いでいるマカとソウルを見かけた。

「？マカとソウルか……いやな予感がするな」

気になったアーチャーは走ってマカたちを追いかけ始めた。

「一人しかいねえーけど？」

「あいつの体の中に武器がいる」

「どういうことだよ？マカ」

「気をつけて……出てくる」

そういうと同時に目の前にいた人間の体から黒い影が出てきた。

「！！！」

「クロナ、やるぜ？」

しゃべる剣とその使い手。厄介な相手だ。

「うん」

しゃべる剣は黒い液体になり、使い手の剣になった。

使い手は、その剣で私に向かって攻撃してくる。

それを上手い具合にとめる。そして、グーで殴る。

向こうの体勢を崩し、そのまま連続攻撃をかけるが、使い手は間一髪で避ける。

「くっ！」

さらに怒涛の攻撃をかける。  
使い手の体勢が完全に崩れた瞬間、鎌で喉を切り裂くように攻撃した。

しかし、使い手には効かなかった

「そんな斬撃じゃあ僕を両断できないよ？」

「黒い血！？」

「そう、僕の血は黒いんです……」

マカは使い手と距離をとる。

「どういうことだ？」

ソウルは私に聞く。

「多分だけど、あいつの血液自体が武器だと思うわ。だから、皮膚を切っても血液が硬質化して血管で刃を止められた……ブラックスターみたいに魂の波長を打ち込むことが出来たら体内に直接ダメージを与えられるんだけど……魔女狩りでも難しいかも」

「そうか、殺せばいいんだね？その扉      内側に開くんだよね  
……ラグナロク、悲鳴共鳴」

ぴぎゃああああいいいいいいあああ

頭に響く悲鳴と同時に一撃が来る。

「うわぁぁぁぁ！」

さらに連続攻撃がくる。マカは避けるが体勢を崩される。

「マカ！ガードだ！」

ソウルの声に反応するように相手の攻撃を受け止める。

しかし

「ぐわぁぁー！！」

どうやら、武器をも切り刻む攻撃のようだ。

「ソウル！！このー！！」

マカは相手に足蹴りをいれる。

相手には、大してダメージを与えられていない。  
いったん撤退するしかない。

そう決め、後ろにある扉から出ようとした。しかし、扉は開かなかった。

「ダメじゃないか、ちゃんと辺りを把握しておかないと……」

「うそ！？」

「その扉は内側を開くんだよ」

相手の攻撃が来る。

「マカ、攻撃だ！」

「でも！そうしたら、ソウルが！！」

何が起こったのか、一瞬わからなかった。  
時間がゆっくり流れた。

そう、ソウルが私をかばって攻撃を受けている。

「ソウル！！」

マカは泣きたくなった。

ソウルが自分をかばって死にそうで、何も出来なかった自分に腹が立っていた。

ソウルを見て、敵を見上げる。隅っこの方でキラリと何かが光った。

「でわ……」

敵が刀を振り下ろそうとした瞬間、大きな音が鳴る。

ガシャン！キュルルル

窓が割れたと同時に相手の体に何かが突き刺さった。

そう、長い棒が回転しながら敵に刺さっていく。  
「ぐっ………何で僕のカラダが……」



相手も、硬さには自信があったのだろう。驚いているようだ。

「……これで倒れんとは、厄介だな」

割れた窓から一人の少年が入ってきた。

「棒との接し方が解らないよー」

「クロナ！！てめえ……何もんだよ」

使い手の人は、棒をどうしようか悩んでいるようだ。

「私か？ただの通りすがりの正義の味方だ」  
そつ目の前には、アーチャーがいた。

「アーチャー！？」

「もうすぐ、デスサイズとシュタインが来る」

「えっ！？」

「ソウルを見てもらうんだ」

「うん」

「クロナ！取れたか？」

どうやら、敵の剣士は体から棒を抜き、黒い血で止血したようだ。

「ほっ……」

すると扉が粉々になった

「なっお前！せっかくマカに俺の勇姿を見せようと思ったのに！いいことりやがって！」

「なら、早くここに来るんだな。シュタイン、ソウルを見てやってくれ」

警戒を緩めることなく、シュタインに伝えるアーチャー。

「わかってますよ」

「ぐっ……………」

「どうすればいいの？メデューサ様……………」

クロナは、誰かと会話しているようだ。

シュタインの方は、ソウルの応急処置は終了したのだろう。

立ち上がり

「さてさて、一仕事しましょうか。アーチャー君は二人をよろしく」

そういつてシュタインとデスサイズはクロナと呼ばれていた使い手と戦い始めた。

クロナを圧倒する、二人。

クロナも黒い血を使い時間差攻撃を仕掛けるが、シュタインの魂の波長が効いているのだろう、クロナの方がかなり不利となった。

数分で決着がついた。

クロナは倒れ、血も武器として機能しなくなった。

「鬼神を生まないためにも、ここで死んでもらう！」

攻撃しようと振り上げたとき、クロナ指が動いた。

そして、クロナの体から棘が出たり引つ込んだりする。

そう、拒絶反応だ。

「ソウルプロテクト解除」

そういう呟きが聞こえた瞬間、魔力が解放される。

マカもシュタインも驚いた顔をする。

そして、シュタインは叫んだ。

「この反応、魔女か！」

アーチャーは今まで反応がなかった魔力の源を見る。

黒いフードをかぶっている人。

「これが、魔女か」

この世界の魔法とは一体どういうものなのか。

「ネークスネークコブラコブラ……ベクトルアロー」

その魔女から攻撃が迫ってくる。

アーチャーは干将莫耶<sup>かんしょうはくげ</sup>で敵の攻撃を防ぐ。

シュタインは、魂の共鳴の魔女狩りで一掃した。

「今日は、この辺にしとくわ……」

フードをかぶった魔女は、アーチャーを少し見つめ、去っていった。

？  
(後書き)

まだまだ続きます！

次はエクスカリバーを・・・それこそ番外編として出すべきか？  
いや・・・うーん。悩み中です。

？  
（前書き）

エクスカリバー編開始！

？

ソウルが倒れたという噂はあつという間に広がった。

マカもショックを受けているようで、気分が沈んでいるみたいだ。

そんな中、私は図書館でこの世界について調べていた。

ここに住むのであれば、一通りの歴史やこの世界での概念を学んでおかないと……

自分の行動しだいでは、自滅する可能性だってあるのだ。

本を選び手にとって色々読む。

魔女のこと、鬼神のこと、魂のこと、死神様のこと……

知らないことは一番の罪である。

本を元の場所に返し、他の本を探そうとしていたら、階段を下りたそばでブラック スターを見つけた。

近くには、キッドもいる。

「ぎやははは！カリスマ・ジャスティス最高！」

「おい！君図書室では静かにしたまえ」

「あつ！！ワリィ……ってキッド！」

「何だ？お前もおしおき食らったんか？」

どうやら、ブラック スターはお仕置きで図書館の本整理でもさせられているのだろう。

全くと言っていいほど進んでない……

証拠に本が山積みされていて、その頂点で漫画を読んでいる。

「違う。本を借りに来たんだ。何かすばらしい芸術品が見たくてね。君の尻の下にある本をとりたいんだがよいかな？」

「ああ、これか？」

「うむ」

キッドは本を手取る。

ブラック スターは覗き込んで本の題名を読む。

「何だ？それ？エク……エックス……エク……ダメだ！読めねえ」

「エクスカリバー」

キッドの言葉に、アーチャーは反応する。

「エクスカリバーだと？」

「あっアーチャーじゃん」

「どうしたんだい？」

「それは、どういったものなんだ？」



「ああ、”聖剣”と呼ばれる伝説の剣だそうだ。その剣を地面から抜き、解き放ったものは勇者と称され永遠に讃えられる。過去にエクスカリバーを手にしたものは”王”にまで登りつめたと聞いている。職人王アーサーだったかな？」

「やっぱりあのエクスカリバーか」

この世にも、エクスカリバーが存在するらしい。  
しかもアーサー王のくだりまで殆ど一緒である。  
アーサー王……そう思って思い浮かぶのは、彼女。  
セイバーの剣。そして、衛宮士郎と関係のある剣。  
だが、なぜ投影できないのか。それが解らない。

「さぞかし、美しい左右対称シンメトリーの剣なのだろう！スバラシイ！」

「”勇者””王”俺にぴったりじゃん！」

それぞれ思いを馳せているところに、シュタインがやってきた。

「ああ、エクスカリバーね」

「博士は、聖剣について、何か知っているんですか？」

「聖剣エクスカリバー……俺にも無理だったよ」

「何！？チャレンジしたのか！？」

「博士にも抜けなかったとは……」

「……………」

シュタインは無言のまま何か考えているようだ。

これは、何かあると考えていい。

あの顔は、何か知っている。そう感じるアーチャー。

「聖剣エクスカリバー……」

「興味しんしんだぜ！」

場所は、ブリテン島北部。

キッド・ブラック スター・アーチャーは滝を見上げながら、会話をしていた。

「この頂点にあるのか」

「もうすぐだな」

もつと大変な場所にあるのかと思いきや、案外近くの洞窟で封印されているそうだ。

キッドは、スケボーの改良版ぱい乗り物で、すでに上がり始めている。

ブラック スターも負けじとキッドの後を追っている。

シュタインの反応に引っかけかりを感じながらも、アーチャーはそのまま着いていった。

妖精の楽園”悠久の洞窟”にたどり着いた。

「あれ？キッドは？」

「下が泥で降りれん……クツが汚れてしまっ」  
「何やってんの？お前」

「おぶってくれ」  
「一生やってろー」  
「彼がいないとエクスカリバーの元へたどりつけん」  
「あっ……」

結局ブラック スターがキッドをおぶって、アーチャーが傘係となった。

そのまま進んでいくと小さな妖精と出会った。

「おお！妖精だ」  
「エクスカリバーはこの先にいるのか？」  
可愛い妖精は、すごい顔をして  
「うん」

そう返事した。

絶対何かある。これは……ヤバイかもしれない。  
アーチャーはそう思いながらもキッドたちについていく。

最深部までたどりついたようだ。

真ん中に丘があり、剣が刺さっている。

「おい！あれが？」

「ああ、間違いない。聖剣エクスカリバーだ！」

あれ？見たことある剣と全く違うんだけど……もつと……  
どういったらいいんだ。  
なんていうか……気品？見たいのがあった。

しかし、目の前の剣はどうだろう。

確かに綺麗な剣ではあるが……

嫌な予感しかない。あけてはいけないパンドラの箱のような感じ。

「わーい！俺、勇者！！」

「なんと！！」

ちよつと待て！そんな簡単に抜けるのか！？それでいいのか！？  
選ばれた者しか抜けないんじゃないのか！？

なんかセイバーの偉大さがガクンと下がったぞ！！どうしてくれるんだ！

キッドも同じことを思っているみたいで、ブラック スターにもう一度やろうとっている。

ブラック スターは刺し直し、今度はキッドが抜こうとしている。

サクッと抜けた。どうやら誰でも抜けるらしい。じゃなんでシュタインはあんな反応をしたのだろうか。

疑問はすぐに解けた。

「よくきたな！若者たちよ」

「聖剣が……」

「あいさつがおくれたな！私がエクスカリバーである」

そういい、現れたのはシルクハットをかぶった人間みたいな生き物だった。

「さて、ブラック スターはちゃんとやっているかな？」  
ブラック スターにお仕置きを言い渡したシドが図書室にやってきた。

本は綺麗に並べてあり、思わず関心する。

「やれば出来るじゃないか！」

「あつ！シド先生！この本を納めれば出来上がりです！」  
そこにいたのはブラック スターではなく、椿だった。

「椿！？あのクソガキ！！椿に押し付けてどこ行きやがった！」

「そんな……いいですよ！私お掃除好きですから」

「ブラック スターなら、キッドやアーチャーと一緒に聖剣取りに行きましたよ？何かまずかった？」

シユタインはそう答える。

「聖剣って……あの聖剣か？」

「そう、エクスカリバー」

「空を裂き、地を持ち上げる伝説の剣……」

「……」

「……」

「考えるのはよそう」

「ああ、やめておこう。さーて採点でもするか」

「お前が聖剣？そのなりで？ちょーしょべえー」

「では聞くが、君はそのなりで何者なのだ！？」

「俺か？俺はブラック」「私の伝説は12世紀から始まった！君たち見たところ職人のようだな？どこから来た？」

「いちいち杖をこつち向けんな！うざつてえ」

「私たちは死武専」「そうだ！いいものをみせてやろう！」

「聞いたいて聞かねえのかよ」

なんなんだこの物体は……

ブラック スターもキッドもイライラしているようだ。

このエクスカリバーどうやら、話を聞かない上に自分の話しかしていない。

あれ、なんか泣けてきた。

エクスカリバーの凄さがなんか半減しているような気がするんだけど。

気のせい？いや……そんなことあるかもしれない。

「おい、アーチャーどうしたんだよ？」

「いや……思っていた以上にこれはきつい」

シユタインが合わないと言ったのも解る。

こいつに合わせれる奴はいないんじゃないかと言っくらいウザイ剣だった。

ああ、セイバーのエクスカリバーが懐かしい。  
あれはしゃべらないけど……

「おぬし、何者？」

「私か？私はアー」私の朗読会へ招待しよう。まずはこの説明書を読むのだ！」

これは、相手するのはきつい。

「虫唾ダッシュだな」

「同じく」

ブラック スターとキッドはエクスカリバーが剣になった瞬間を見計らって、再び刺した。

「誰がお前なんかと……」

「虫唾が走るわ」

そういつて、帰って行く。

「アーチャーどうした？」

「私は、他にやることがあるから、先帰っていてくれ」

「何をやるんだ？」

キッドは不思議そうに聞く。

「ああ、妖精に話を聞こうと思ってな」

「物好きなやつだなあ」

ブラック スターはキッドをおぶってそのまま帰っていった。

？  
**（後書き）**

もう少し続きます！  
オリジナルを入れたと思ってます！



？  
**（前書き）**

おまたせしました？

エクスカリバー編の続きです！

10 / 4 修正

？

キッドたちが見えなくなつて、再びアーチャーは丘に上がる。

そして、刺さる剣を見つめる。

これが噂のエクスカリバー

アーチャーは、剣を持つ。

そして、鍛錬の時と同じように架空の敵を想定し剣を構える。すると手に微量の電撃が走った。

「むっ……上手くいくと思ったのだが」

「何をする！？貴様！」

微妙な電流に怒つて、エクスカリバーが人間の形へと変化する。

「やはり、無理なのか？」

アーチャーは、職人のくせしてこの世界の武器と相性が悪い。

ソウルや椿、トンプソン姉妹が武器になっている時に触ってみたが……

大惨事になった。握るところか、もつことすらままならない。

エクスカリバーの場合は、少しマシになっただけだ。

「おぬしは、職人ではないのか？」

「一応は「私の職人には、なれないのか!？」」

「……そんな「残念だ!せつかくだから、私の武勇伝を聞かせてやる」」

「……」

「私の伝説は12世紀から始まった!あれは、日差しの強い真夏だったか……いや、肌寒くなる秋だったか……当時の私は悪でねえ……そういえばもう冬だったかもねえ。すごく「悪」で巷でも有名な「悪」だった。悪そうなやつは皆友達だったよ。美女たちは私を取り合いをしていたよ(以下略)」

「はぁ……」

アーチャーはため息をつく。

そして、集中する。

「いったん黙れ。トレースオン 投影開始」

「ん?何か「ノリ・メ・タンゲレ 我に触れぬ」」

すると、赤い布がエクスカリバーに巻きつけられる。

そう、マグダラの聖骸布だ。

男ならこの束縛から逃れることができない。

まあ、こいつが男と言っ前提で投影したのだが……

どうやら、上手くいったらしい。

「何をするッ！」

「……勝手に話を始めるからだ」

「ヴァカメ！！私の偉大な伝説が聞ける機会など、なかなかないんだぞ？」

「別に「ヴァカメ！朗読会は正座で聞くものだ」

「カランドボルク  
“偽・螺旋剣”」

「ヴァカメ！そんなので私は死なん！伝説は　　うぎゃああ！」

「あつ……やってしまった」

少しというより、かなりイライラしていた、アーチャーは思わず攻撃をしてしまった。

「エツキシ、イツキシ、エツキシ」

「……へんなくしゃみだな」

「おぬしは一体何者だ。この技は魔法に近いな」

「……」

「魔法といっても、私の敵ではない！12世紀の悪だったころは、もつと無茶を……」

「もう一度、殺<sup>ころ</sup>るべきか？」

本気で、考え出したアーチャーであつた。

地球のどこかの魔女集会<sup>ミサ</sup>

「ジョーマ、ジョーマ、ダバラーサ。これにて魔女集会<sup>ミサ</sup>おひらき！」  
クロナと一緒に目つきの鋭い髪の短い女性が集会<sup>ミサ</sup>を後にしようとしていた。

そこに、蛙の帽子をつけた女と鼠の帽子をつけた女が行く先を阻む。

「なんのようかしら？エルカ」フロッグとミズネ」

「メデューサ……あんた死武専に潜伏して何やってんのよ？目障りなのよ」

目つきの鋭い女性      メデューサはエルカの方を向く。

「私の死武専での研究はこのまま続ける。魔女ミサの結論でもそう  
なつたじゃない。魔婆様<sup>まはあさま</sup>もおっしゃたでしょ？」

「魔婆様は目を悪くして目の上のたんこぶに気づいていない。死武  
専は魔女の魂を狙う組織だぞ！？お前一人のヘマで我々が危険にさ  
らされるかもしれないわ！それに、魔女の敵になりかねない鬼神を  
作ろうだなんて！！」

その言葉が終わると同時に、メデューサはエルカとミズネの口に手  
を突っ込み一言、

「カエルとねずみふぜいが……おしおきするわよ」  
「ひい!？」

「でわ、ジヨーマ、ジヨーマ、ダバラーサ、保健の先生が遅刻するわけにはいかないでしょう？」

「ゲーコー」  
うなることしか出来ず、そのままエルカとミズネはメデューサを見送った。

先ほどから、エクスカリバーが一方的に会話している。

「……………ふう」

話を聞かないエクスカリバー。しかし、一方的に話す彼の話にも、色々な情報を得ることが出来た。

本を読んでいるだけでは得られない情報ばかりだ。

まあ、彼……エクスカリバーを信じるならば……だが。

「長い間生きてきたが、おぬしのような人は、初めて見るな。職人  
といていたが、相棒はいないのか？」

「相棒……」

そう言っと思いつくのは凜だったり、セイバーだったりする。まあ  
相棒と言えるかどうかは微妙だが……

「……その歳でここまでたどり着けるのに、相棒はいないのか？」

「相棒……これのことか？」

そういつて、見せたのは干将莫耶かんしょうばくや

「ヴァカメ！これは、鉄の塊だ。私が言うのは武器と呼ばれる相手だ」

怒りながら、杖を私に向けてくる。ちょっとウザイ。

「いない」

「それにこの鉄の塊には不思議な力が働いているようだが……」

「解るのか？」

「ヴァカメ！それぐらい解らんでどうする！」

さらに杖をツンツンと私の顔に攻撃してくる。やっぱり生理的に無理。

まだ金ぴかの方がイライラしない。凜がこいつに会ったら、真っ先にガントをぶっ放すだろう。

「魔女の魔法に近い。おぬし狙われるかもしれんから注意しておくのだな」

「言われずともその予定だ」

「その護衛のために私が人肌脱いでやろう！さあ！私を使うんだ！」

エクスカリバーが人型から剣に戻り、上のほうから降りてくる。

それを受け取った瞬間、丘に差し込んだ。

キッドやブラック スターがやったように。

「正直面倒なんで、貴様はここにいるべきだ」

そのときのアーチャーの笑顔はすごく輝いていたと周りにいた妖精たちは語る。



？  
（後書き）

改変しました。  
続きはもう少しお待ちください。

？  
(前書き)

お待たせしました・・・

なんか勢いじゃないとかけないなあつてのを実感しました。

矛盾万歳でいこうかなあなんて思い出すこのごろです。

？

魔女牢獄で、ある日一人の男が脱走した。

その男は、魔眼の男。

少々頭は悪いが、彼はすごい能力を持っていた。

その能力とは……不死。

「あんたが、俺を解放してくれた変わり者の魔女か？」

その男は今、メデューサと一緒にいた。

「メデューサよ。よろしく、魔眼の男」

「魔眼の男　　そうか、俺はあの牢獄に入れられて、名前も何も取られてしまったんだな。そうだな、今は自由の身だから、フリーとでも呼んでくれ」

「フリーね。よろしく」

「どうだろう？何かお礼をしたいのだが」

「いいのよ。気になさらないで」

「それでは、俺の気がすまない」

メデューサは魔眼の男の性格を把握している。

思わず笑みがこぼれる。

「そうね、じゃあ一つ頼みたいことがあるんだけど……」

ある武器と職人を潰して欲しいの……簡単でしょ？

マカとソウル、ブラック スターと椿、そしてアーチャーは課外活動のためにロンドンまで来ていた。

「ひゃはああああ！ブラック スターインロンドンだぜ！」

アーチャーは後ろから見て一言、

「元気だな」

椿は雪が降っているのに、ブラック スターの格好が半そでなので、風邪を引かないか心配しているようだ。

「ブラック スター……寒くないの？」

「何言ってるんだ！この寒さ、脱ぐことはあっても着ることはねえ」

「いかななものかと……まあ何とかは風邪引かないというしな」

「なんだと!!」

アーチャーに突っかかるうとするブラック スターを椿は宥める。

「マカちゃんもソウルくんも、見ていないで……」

マカとソウルは互いに無視している。

現在進行形で。どうやら、仲が悪くなったみたいだが……前はこうじゃなかったはずだ。

「椿、どういうことだ？」

「なんかシユタイン博士に特訓してもらってから、あんな風になっちゃたみたいで……」

あの人何したんだよ……

とにかく、マカとソウルは仲悪いまま、この任務を受けているらしい。

最悪、任務失敗ということもあるのか……

注意しておかねば……

そう、考えていたアーチャーは遠くで光る何かを発見した。一瞬であつたが、魔力反応もある。

魔女がいる。そう考えたアーチャー。

「椿、ブラック スター。ソウルとマカを頼む。私は少し用事が出来た」

椿とブラック スターにマカとソウルを任せ、光っていた場所へ向かった。

そのころ、メデューサは別の場所へと動いていた。  
すべては黒血の研究のために。

フリーから少し離れた場所で、観察するために。

フリーとマカ、そしてソウルは出会った。

「ふふふ……黒血はどう活性化するかしらね」

思わず笑みがこぼれる。

水晶で黒血の持ち主の観察を始めようとした瞬間、後ろに白い髪の赤い服の少年が立っている。

メデューサは、気がついていた。

「お前は何者だ？」

アーチャーの問いにメデューサは答えた。

「私？私は魔女よ」

その答えを言った瞬間にアーチャーの隙を狙い、後ろへと回り込み、拘束する。

首元には刃物。

「あらあら？ 案外あつけないのね」

もつと抵抗するのかと思っていた。自分の見込み違いかしら？

「（早いが……）期待に添えれず申し訳ないな。貴方は魔女か。初めて見る」

アーチャーにとっては、初めて見る魔女。

アーチャーは思っていた。

ああ、破壊の目だ。

あの目は破壊に快楽を求める人種の目だ。

ああいった類は死ぬまで破壊衝動が消えない。

魔女は思っている以上にやっかいな相手かもしれない。

「何を考えているのかしら？」

「別になんでもないさ」

「ここで、貴方の首をはねるのもありだけど……そうね、試してあげる。あちらも楽しそうだけど、こちら、面白そうだし」

そうこれは魔女の気まぐれ。

「試す？」

「ベクトルアロー」

そうメデューサが言うと、真っ黒い矢印がアーチャーを襲った。

「ちっ!？」

襲ってきた矢印をアーチャーは干将莫耶かんしょうはくやで叩ききる。

どこに現れるか解らない矢印を叩ききるのは至難の技だった。  
いろんな方向から出されると、対処するのが難しい。

唯一の救いは、一定方向の矢印しか出してこないことだ。

いつたいこの魔法は……

これが異世界ということなのか。

この世界は、私の世界から見れば夢物語のような世界だ。  
魂を食らう武器、その武器と一緒に魂を狩る職人、そして魔法を使う魔女。

私を知る世界では魔法ではなく、魔術と言う。

魔法は魔術の完成形である。いわば、現実不可能なことを可能とする。



そう、この世界の魔法はなんでもアリってことなのだ。

それに、なんの障害や対価無くして魔法を唱えている。

この世界の魔法が完成形だからなのだろうか。

ああ、面白いものを見つけた。

これは本当に興味深い。

魔女は女しかない。まあフリーみたいな特別な例もあるけれど。

それなのに、目の前の男の剣には、何か特別な力を感じる。

この子を研究してみたい。

黒血も捨てがたいが、こちらもなかなか面白い研究が出来るそうだ。

アーチャーは反撃の隙をうかがっていた。

これから、反撃に移ろうとしたときに、メデューサは、

「なかなかやるわねえ……でも時間切れ」

「なんだと……？」

どういうことか理解できなかった。まさか、撤退するのか？

「ふふふ……また会える気がするわ」

そういつて、魔女           メデューサは消えた。

「くっ!! 待て!!」

アーチャーがメデューサを追おうとした瞬間、目の前におたまじゃくしの人形が転がってきた。

「!!!？」

そしてその人形は爆発したのだった。

？  
(後書き)

矛盾等何かありましたら、感想にどうぞ。  
筆の進むまま書いていきたいと思えます。

どうぞ見守っててください。

？  
（前書き）

お待たせしました！  
長い間更新できなくて申し訳ないです。もう少しばんばんと更新したいです。

？

「ちっ……」

少し焦げた服を見て、思わず舌打ちをする。

魔女は消えた。収穫できた情報は少ない。

「魔女の魔法の効果を知れただけでもよしとするか……」

向こうも同じことを思っているのだろう。

それにしても先ほどは危なかった。

あのおたまじゃくしみたいな爆発物の処理は結構大変だった。

爆発する数秒前で遠くに飛ばし、弓でおたまじゃくしを壊した。

なかなかの神業だと自分でも思った。

人間やればできるじゃん。

（この時点で人間技ではないということに気がついていないアーチヤーである）

なんて自画自賛。

そろそろ、ソウルたちと合流しないと。

そう思い、アーチャーは元の場所へと戻って行った。

ソウルたちがボロボロになっていた。

「戦闘でもあったのか？」

アーチャーは知らないで、椿に聞いた。

「ええ、魔眼をもった男が襲撃してきて、それを撃退したところですよ」

「へえ……」

よく見るとマカとソウルの間にはまがましい雰囲気はなくなっており、元に戻ったようだ。

「よりいっそう絆を強くしたところか」

「ん？アーチャー何か言った？」

マカは笑顔でこちらに聞いてくる。

「いや、いつものマカに戻ったみたいで安心したよ」

「えっ……」

マカが少し顔を赤くしている。

ブラック スターはソウルと端っこで会話を始めた。

もちろんアーチャーの発言についてだ。

「なあ、アーチャーってあんな顔してあんなこと言うのか……」

「ああ、結構無自覚ぽいぞ」

「天然か？天然なのか？」

「何してんだ？」

アーチャーはソウルたちに話かける。

急に現れたアーチャーに驚く二人。

「なんでもないぜ！」

「そうそう！」

「そうか？」

アーチャーは不思議そうな顔をしている。

「帰るんだろ？早く死神様に連絡して帰ろうぜ」

ソウルは二人を急かす。

「ああ…そうだな」

ソウル、マカ、ブラック　スター、椿、アーチャーはロンドンから死武専へと帰還した。

同時刻、とある場所にて

男に囲まれて一人の剣士は一言呟く。

「どうしよう……この人たちとの接し方がわかんない」

「喰え」

「うん。  
ひめいきよつめい  
悲鳴共鳴」

すると男は動揺する。

「スクリーチ  
アルファ  
」

残ったのは、魂だけ。

「これなら、誰とも接しなくていい」

幸せそうな顔で、地べたで寝転んでいるクロナ。

その光景は異様だった。

「皆さん、解っていると思いますが、この時期が来ましたね。どうですか？勉強は、はかどっていますか？」

死神武器専門学校。

学校と言っのだから、テストがあってもおかしくはない。

しかし、私も受けないといけないのか。



生徒だから、受けなければならないのは解っているつもりだし、学校に通うものとしては、避けて通れない道と解っている。

が、しかしだ。

「授業をまともに受けたことがない私にテストはしんどいのだが……」

アーチャーは授業をまともに受けていなかった。

それは、サボっていたわけではなく、あるときは課外授業で、あるときは病院となかなか機会に恵まれなかったのだ。ここ最近では死神様の任務をこなしてただけで、授業には一切出ていなかった。

この世界に慣れるには実践しかないと思ったのが仇となったようだ。

マカに相談してみるか。

アーチャーはそう、心に決める。

そんなことを考えているうちにシユタインはいなくなっていた。話が終わっているようだ。

「超筆記って魂学の一教科だけなんだがなあ……」  
「赤点きちい」

どうやら、一教科だけのようだ。これなら何とかなるかもしれない。マカたちと一緒に部屋を出て行く。

「マカ！」

「ん？何？アーチャー」

「今回の筆記のことなんだが、過去問とかあるのか？」

「えっ？いや、ないよ。でもこの教科書とこの問題集をやってればなんとか取れると思うよ」

「そうか、的確なアドバイスをありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

そういつて、マカたちと別れる。

さっそく、アーチャーは図書館へと向かった。

テストまでの数日は、それぞれが勉強をしていた。

マカは教科書や問題集と格闘。

ソウルはなにやら、怪しい行動をしている。

ブラック スターは解けなかったら罰ゲームを決めて勉強するが、罰ゲームばかりやって、全く勉強が進まない。  
そんなブラック スターのフォローする椿。

キッドはリズの眉毛を真剣に考えている。

リズとパティも初めはがんばっていたが、他の事をやりだして全く勉強をしていないと言う状況であった。

そして、アーチャーは優雅に紅茶を飲んでいた。

「久しぶりに勉強というものをやったよ」

この時間が続けばいいのに。とそう願わずにはいらなかった。

そして次の日

試験が始まる前に黒板の前でボコボコにされているブラック　スターがいた。

「試験管のシドだ。試験を始める前に一つ。昨日、シュタイン博士のところにテストを盗みに行ったバカがいる。不正は行なわないように」

そういつて、試験が始まった。

しばらくすると、ソウルも不正していたため、服を全部脱がされ、パンツ一枚になっていた。

マカはあきれているようだ。

アーチャーもため息をつく、問題に集中する。

穴埋め問題からだ。

「健全なる魂は健全なる                      と健全なる                      に宿る」

ああ、どこかで見た気がするなあ……

健全なる魂は健全なる精神と健全なる肉体に宿るだった気がするな。

それから……

順調に問題を解いていく。

KILLコーンカーンコーン

そしてテストは終わった。

超筆記試験結果発表！

1位	マカ	・・・100点
2位	オックス君	・・・99点
—	—	—
27位	椿	・・・81点
—	—	—
45位	アーチャー	・・・65点
—	—	—
108位	ソウル	・・・35点
—	—	—
113位	リズ	・・・28点
—	—	—

128位 パティー・・・2点  
問題外 ブラック スター・キッド

「まあまあだな」

結果を見たアーチャー思う。

高校の時もこれくらいだった気がする。

そんなに頭が良かったわけじゃなかったしな。

「まあ、補習にならなかっただけでもよしとしなきゃね。それにしても、キッドくんは相変わらず見たいだね」

マカは苦笑いしている。

キッドが問題外になったのは、名前が綺麗に書けず、一時間かけて名前を書いていたからだ。

最終的には、名前の欄を消しすぎて、テスト用紙が破れていたが。

「マカ！いくぞ！」

ソウルがマカを呼んでいる。

「うん！いまいく！じゃあね！アーチャー！」

マカは急いでソウルの元へと行く。

アーチャーはマカとソウルを見送る。

「怪しい奴も動き出しているし、これは嵐がくるな」

そんなことを考えていた。

？  
（後書き）

まだ改良の余地ありですねえ・・・これから黒血編を・・・かけた  
らしいなあ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7809u/>

---

SoulEater - fate-

2011年11月8日23時12分発行